
■ 1-2 日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究

● 共同研究の活動概要

研究代表者 伊藤 康宏

本プロジェクト研究は、これまでの水産史研究会での研究交流を踏まえて研究の連携・ネットワークの強化を図ると共に、日本列島周辺海域における「魚と人の関わり」に関して歴史的、地域的、民俗的特質を海域の視点から総合的に解明することとして2009年度からスタートした。そこで期待される成果として①水産史に関する研究ネットワークの構築と情報発信、②神奈川大学日本常民文化研究所と独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所の両機関所蔵の漁業制度改革資料等を使った水産史研究、③各海域・時代ごとの水産史的特質（「魚と人の関わり」）の総合的解明等とした。以下、5年間の研究成果の概要を取りまとめる。

まず①については2012年9月29日、30日、神奈川大学国際常民文化研究機構において第6回水産史研究会を開催した。参加者26名、本プロジェクトメンバーの他に新規に大学院生の参加もみられ、これまで以上に盛況となった。同会は初日の個別研究発表（本プロジェクトメンバー、末田智樹「平戸藩生月島の益富又左衛門組の捕鯨業—西海地方の鯨組史料（筆写稿本）にみる運上の実態を中心に—」、片岡千賀之「戦前における東シナ海・黄海漁業の発展と漁業政策」、中野泰「『漁業権改革』における『日本漁村調査』の位置—Chronological Record of Actions Concerning Fisheries Rights (1947-48年)を中心に—」を含む計7報告）と2日目の特集「二野瓶漁業史学の成果と展望」をテーマに活発に議論が交わされた。とりわけ後者の特集では本プロジェクト研究に関わる二野瓶漁業史学について小岩信竹氏を司会に3報告と討論が行われた。すなわち、二野瓶氏の漁業制度資料調査保存事業への関わりとその後の漁業史研究を主題とした越智信也「日本常民文化研究所と二野瓶徳夫」、二野瓶3部作（『漁業構造の史的展開』、『明治漁業開拓史』、『日本漁業近代史』）ならびに『明治大正年代における漁業技術発展に関する研究Ⅱ』のうち近代日本の主要な漁業・漁業技術の問題を取り上げた片岡千賀之「二野瓶徳夫氏の漁業史研究をめぐって」、そして前掲『明治漁業開拓史』の成果と課題を踏まえて明治初期の府県漁政とりわけ島根県「漁業場区」制を主題とした伊藤康宏「漁業法以前の漁業制度史研究と二野瓶徳夫」の3報告からなった。そして総合討論では二野瓶漁業史学（二野瓶3部作）は近世から近代にかけての日本漁業の包括的かつ実証的な研究として研究史上に高く位置付けられるが、近世・近代の関係（「旧慣」の内実等）や個々の主題（府県漁政、資源管理・漁業組合・加工・流通・貿易・消費、海外出漁等）が残された課題として確認された。さらに2013年度の第7回水産史研究会では神奈川大学国際常民文化研究機構にて2日目（9月29日）に設定された特集「近代日本における東と西の漁業・漁村」をテーマに小岩信竹「近代青森県漁業の展開過程—漁民組織を中心に—」と伊藤康宏「近代島根県の漁業政策と漁業組合」の2報告をもとに認識・議論が深められた。

一方、②と③については『国際常民文化研究叢書 第2巻』（神奈川大学国際常民文化研究機構、2013年3月）を3年間の研究成果として取りまとめた。収録された論文は、時代区分では前近代2本、近代3本、近現代1本、現代2本で、海域別では対馬海域3本、親潮海域1本、内海・内水面が各1本、その他2本である。内容は漁業権・漁業制度から生産・流通までの多様な研究テーマからなり、それらを②テーマ「漁業制度」と③テーマ「魚と人の関係史」の2部の構成で編集した。

以下、目次構成を示しておく。

第Ⅰ章「漁業制度」は、複雑な支配関係にあった近世琵琶湖の禁漁場を取り上げた鎌谷かおる論文（「日本近世の内水面漁業における禁漁場について—琵琶湖を事例に—」）、明治初期の府県漁政とりわけ島根県の漁業制度変革について明治期の筆写稿本史料と原本の島根県行政文書を使って論じた伊藤康宏論文（「明治初期の漁業制度変革—島根県『漁業場区』を事例に—」）、明治期における漁業制度変革と漁村間の漁場紛争の関係に焦点を当て主に筆写稿本史料を使って論じた小岩信竹論文（「近代における青森県下北漁村をめぐる漁場紛争の展開—尻屋の事例—」）、漁業権制度改革におけるGHQと日本の民俗学者の関係および後者の関与をはじめ論じた中野泰論文（『「漁業権改革」における『日本漁村調査』と民俗学者の実践—天然資源局文書：Chronological Record of Actions Concerning Fisheries Rightsを中心—」）、戦後の地域開発に伴う共同漁業権の消滅過程において漁業権の補償問題に関して漁民組織の対応について瀬戸内海の兵庫県姫路市の事例を取り上げた足立泰紀論文（「都市臨海部の工業化と沿岸漁業—姫路市における事例—」）の5本からなる。

他方、第Ⅱ章「魚と人の関係史」では近世のクジラ、近代の底魚、近現代のシイラと人の関係が社会経済史・歴史地理学の観点から論じられている。すなわち、近世中後期の西海海域における平戸藩生月島の益富組の経営拡大過程について筆写稿本史料を駆使して論じた末田智樹論文（「西海捕鯨業地域における益富又左衛門組の拡大過程」）、近代の東シナ海・黄海の底魚資源をめぐる展開した日本、中国、植民地朝鮮・台湾の汽船トロール漁業・機船底曳網漁業・母船式レンコダイ延縄漁業とその政策対応との関係について論じた片岡千賀之論文（「戦前の東シナ海・黄海における底魚漁業の発達と政策対応」）、日本列島周辺海域を回遊するシイラを対象に地域漁業とその利用の展開を論じた橋村修論文（「日本列島周辺海域における回遊魚シイラの漁業と利用—明治20年代～平成10年代—」）の3本からなる。

当初、期待された研究成果として提示した①と②についてはある程度、達成されたものと見ている。すなわち①は冒頭、紹介したとおり、2012年度、2013年度の水産史研究会において、「二野瓶漁業史学の成果と展望」および「近代日本における東と西の漁業・漁村」をテーマとして総括的に取り上げ、議論することができた点である。また②の漁業制度改革資料（筆写稿本史料）を使った研究として末田・伊藤・小岩の3論文が発表され、同史料を使った研究活用の道が開けたと言える。今後は史料のデジタル化と公開・閲覧体制の整備が早急に望まれる。一方、③の海域における水産史的特質の解明については十分に議論を深めることができず、新たな切り口を提示できなかった。この点は今後の課題であるが、これまでの前近代の研究成果を踏まえ、近現代を中心とした水産史的特質の解明ならびに二野瓶漁業史学の残された課題の解明がとくに問われる。

以下、関連の主な研究成果リストを掲載しておく（ただし、『国際常民文化研究叢書 第2巻』は省略）。

足立泰紀：「戦後の播磨灘地域における沿岸漁業の変容」（口頭発表、神奈川大学 国際常民文化研究機構「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」共同研究会、2011年）

伊藤康宏：「明治前期の博覧会と『水産図解』」（『神奈川大学 国際常民文化研究機構 国際シンポジウム報告書Ⅰ 海民・海域史からみた人類文化』2010年）、単著『山陰の魚漁図解』（今井出版、2011年）、「島根県『美保関漁場慣行調査書』」（『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』1、2010年）、共著「琵琶湖における『漁業環境』の再考—コメントにかえて—」（『地域漁業研究』53-3、2013年）、「沿岸漁業のコモンズと浦・漁業組合」（秋道智彌編『日本のコモンズ思想』、岩波書店、2014年3月）。

片岡千賀之：「以西底曳網漁業の戦後史Ⅱ」（『長崎大学水産学部研究報告』91、2010年）、「五島・小値賀におけるアワビ漁業の変遷」（単著『長崎県漁業の近現代史』長崎文献社、2011年）、共著「明

治期における長崎県の捕鯨業—網取り式からノルウェー式へ—」(『長崎大学水産学部研究報告』93、2012年)、共著「汽船トロール漁業の発展と経営」(『長崎大学水産学部研究報告』94、2013年)、「戦前における以西底曳網漁業の発達と経営」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』4、2013年)。

鎌谷かおる：「近世琵琶湖の漁業と漁村—堅田漁師を事例に」(『歴史と民俗』29、2013年)、共著『日野町史』第3巻(2013年)、共著『東近江市史』2巻(2013年)

小岩信竹：「近代における漁業組合の諸相—青森県の事例—」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』2、2011年)、「近代北海道における漁業組合と水産組合の活動」(『東京国際大学論叢経済学部編』47、2012年)、「朝鮮漁業令公布以後の朝鮮における漁業組合の展開—日本人関係漁業組合の事例—」(『人間科学研究』9、2012年)、「昭和初年における地方水産業改革の方向—青森県の事例—」(『東京国際大学論叢経済学部編』48、2013年)、「近代における台湾漁業の展開と榎谷政鶴の漁業権論」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』4、2013年)。

末田智樹：「西海捕鯨業地域における巨大鯨組の形成過程—益富又左衛門組の運上に関する史料紹介—」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』3、2012年)、「平戸藩領域における益富又左衛門組の成長過程—安永九年鯨組運上史料一瞥—」(『中部大学人文学部研究論集』30、2013年)、「平戸藩領の捕鯨漁場における巨大鯨組の萌芽—天明初期益富組の鯨捕獲をかいま見る—」(『民俗と歴史』31、2013年)、「寛政前期平戸藩領域における捕鯨業の様相—益富大嶋組の運上史料から探る—」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』4、2013年)、「平戸藩領益富組の取揚鯨と捕鯨漁場—原史料と筆写稿本の融合活用—」(口頭発表、神奈川大学 国際常民文化研究機構「漁場利用の比較研究」「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」共同研究成果発表会、2014年)。

中居裕：「中央卸売市場(水産物)の展開要因の変容に関する考察」(『市場史研究』31、2012年)、「昭和20年代における水産物輸出に関する考察—スルメを事例として—」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』4、2013年、口頭発表、神奈川大学 国際常民文化研究機構「漁場利用の比較研究」「日本列島周辺海域における水産史に関する総合的研究」共同研究成果発表会、2014年)

中野泰：「民俗学における『漁業民俗』の研究動向とその課題」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』1、2010年)。

橋村修：「回遊魚の利用をめぐる環境史—対馬暖流域において—」(『日本列島の野生生物と人』世界思想社、2010年)、「日本列島における『旬』をめぐる環境民俗—地魚・回遊魚・地元民—」(『文化人類学研究』12、2011年)、「あま漁村の俵物諸色海産物の採取と集荷の権利—近世後期の肥後国天草郡二江を事例に—」(『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』63、2012年)、「魚の民俗と神話—海と川の回遊魚スズキと暖流域の回遊魚シイラー—」(『古事記 環太平洋の日本神話(アジア遊学158)』勉誠出版、2012年)、「食の安全・信頼を造る地域の魚をめぐる漁撈・加工・魚食—資源循環の民俗—」(『生活学論叢』21、2012年)、「回遊魚利用をめぐる文化地理」(『漁業、魚、海をとおして見つめる地域』冬弓舎、2013年)、「沖合集魚装置漁業をめぐる漁場利用の史的展開」(『国際常民文化研究叢書 第1巻』2013年)。

森脇孝広：「ビキニ事件〈原爆マグロ〉問題にみる「人と魚の関係史」」(『神奈川大学 国際常民文化研究機構年報』5、2015年)